



ひのと賞

『クトゥルーの呼び声』 H.P.ラブクラフト

経済学部リーガルエコノミクス学科 4年
永田 健斗

『クトゥルーの呼び声』は20世紀最大の怪奇小説作家と称される、H.P.L（ハワード・フィリップス・ラブクラフト）の作品『ダゴン』『神殿』をはじめ、『クトゥルーの呼び声』や『インスマスを覆う影』など8作品が掲載された、まさにクトゥルフ神話の入門書とも言うべき本である。

そもそも、クトゥルー神話とはラブクラフトを中心とした作家達が同じ世界観（アーカム）や固有名詞（ネクロノミコン）などを共有する中で作られた架空の神話体系であり、SCP財団や東方projectの広がり方と似たような珍しい歴史がある。

ジャンルとしてはコズミックホラー（宇宙的恐怖）とは呼称しており、実際作中で仄めかされる神話生物は宇宙生物と呼称してもいいだろう。では、そうした存在に追い詰められていく恐怖の物語なのかというところではない。我々人類では計り知れない理解を超越した「真実」を、もはや狂氣的とも思える好奇心で求める、あるいは偶然そういったことに触れてしまった者達を描いた物語なのである。

それだけならばありふれた架空のSF物語であるが、ラブクラフトの物語はまるで物語の出来事が現実起きたのではないかと錯覚させる説得力があるのだ。ラブクラフトの物語の舞台は1920年代が多く、当時の社会情勢が物語に大きく反映されている。例えば『神殿』は史実でも運用されたドイツの潜水艦U-ボートの乗組員の手記という体で書かれており、現実での出来事を上手に取り入れつつ、現代からすると古めかしい表現などがより当時の出来事を記したかのように想起させるのである。

そして、「真実」へと近づいていく者達の心理描写が緻密かつ巧みに描写されており、まさに語り手の感情の機微が手に取るように分かる文章が読者に没入感と物語の結末への興味心を与えてくれるだろう。

最後に、『クトゥルー神話』の物語に触れた者にはある変化が訪れるのだが、それは実際に物語を読んで、読者自らが体感してほしい。ぜひあなたがこちら側へ来ることを楽しみにしている。

いあいあくとうるふ、ふたぐん！

